

# 子供が一人で屋外にいるときに扱える救急セット

## First-aid kit for children to use on their own in outdoor

樋渡亜海

指導教員 李盛姫

サレジオ工業高等専門学校 デザイン学科 ビジュアルコミュニケーション研究室

キーワード：救急セット、子供、怪我、屋外

### 1. 研究動機・目的

本研究を行うにあたった動機として、幼い頃に適切な処置がとれなかったことが原因で、怪我が悪化し、医師に叱られた経験があることが挙げられる。そのため、本研究では、子供の怪我の悪化を防ぐことを目的とした、子供が理解しやすく、持ち歩きが可能な救急セット及びハンドブックを製作する。

### 2. 調査内容

まず、子供がどこで、どのようにけがをするのかを、2012~2016年の消防庁の救急搬送データに基づき調査した結果、最も多いけがの原因は「転倒」で、全体の約3割にも及んだ。また、一人で行動することが、乳幼児に比べて多いと考えられる小学校低学年の転倒による怪我は、56.2%の割合で、屋外で発生していることがわかった。

以上を前提とし、次に屋外のどのような場所で怪我が発生しているのかを調査した。消費者庁の人口動態調査によると、小学校低学年に当たる6~8歳の約4割近くが道路・駐車場で怪我をしてしまったということがわかった。(図1参照)

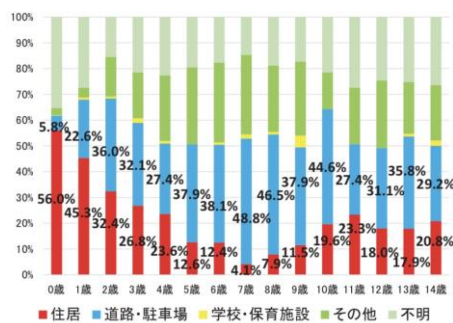


図1

以上の結果から、小学校低学年の子供が、適切な処置が可能ではない場所で、怪我をしてしまうことが多いという結果が得られた。しかし、すぐに適切な処置が施されない場合、転倒による怪我は、傷口が化膿してしまう、傷口から感染症にかかってしまう、あるいは、痣として今後成長しても残り続けてしまう可能性が非常に高いと考えられる。

では、一体保護者はどのように考えているのだろうか。小学生の子供を持つ保護者の500人を対象としたインターネットアンケートの結果、子供の安全について不安があると答えた割合は、92.8%にもものぼる。また、最も多くの保護者が不安に感じることは、交通事故に遭うことで、怪我をすることに関しても、51.2%の保護者が不安に感じていることが調査内容から得られた。不安を感じる場面で最も割合が大きかったのは、「一人で外に遊びに行くとき」で、47.2%となっている。(図2参照)

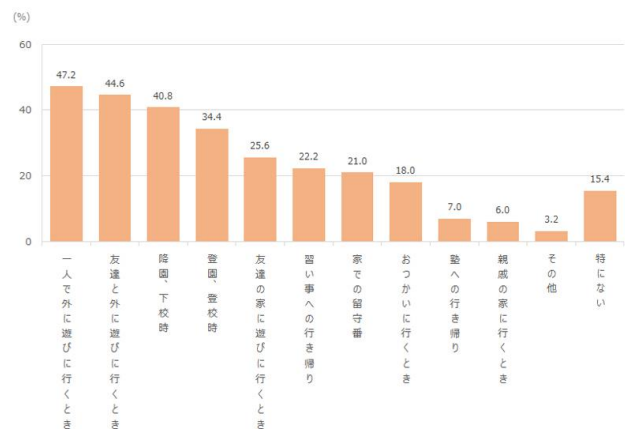


図2

以上のことから、子供が一人で遊びに行く際には、救急セットを常備した方がいいのではないかと考えた。

### 3. ターゲットとコンセプト

ターゲット：小学校低学年

コンセプト：持ち歩きが可能な子供が理解しやすい救急セット

### 4. アイデア展開

今回アイデアとして、持ち歩きが可能であることを前提に、主に転倒が原因で作られる怪我の治療が可能なものを内容物として、そのパッケージデザインのアイデアを広げた。

子供が外に持ち出す上で、持ち手がないポーチや、救急箱のようなかさばるものは控えた方がいいと考え、最終的に、給食袋のように持ち歩くことができ、簡単に開くことが可能な巾着タイプの入れ物を採用した。また、擦り傷、切り傷などに使える絆創膏は剥がすだけですぐに使えるシールブックタイプを、消毒は、手元にハンカチやティッシュがなくてもすぐに対応できるようウェットシートタイプを採用した。捻挫、打撲を冷やすための冷却剤は、叩くと冷えるタイプの瞬間冷却剤を採用、固定用のテープは、よく伸びるものに一定間隔でミシン目を入れる予定であり、怪我の適切な処置を指南するブックレットは、全編ひらがなで、図付きで説明する内容にする予定である。また、汚れに強い丈夫な紙を使い、サイズは A7 程度を検討している。

デザインの全体的な方向性としては、大きく道具名をひらがなで表記し、シンボルマークをパッケージに大きく載せることでわかりやすさを追求する。また、色合いは彩度が高すぎず、明度が高い柔らかい色合いで統一していく。

### 5. 最終提案・今後に向けて

今後の展望として、現在考案中のデザインのモデルを試作し、子供が現段階のデザインで使いやすいと感じるのかを検証する。そして、ブックレットの内容をさらに細かく検討していく予定である。

### 6. 参考文献

1. 東京消防庁「救急搬送データからみる日常生活事故の実態」（2012年～2016年）
2. 消費者庁「人口動態調査」（2010年～2014年）
3. 株式会社イード「母親の子育てや子どもの安全に関する意識調査」（2015年4月2日～4月6日実施）



現在考案中のアイデアの一部